# 偽札とラブレター

ついに偽札が完成した。

それは文句なく会心のできばえだった。印刷機から出てきた一万円札を両手で持ち、ランプの前にかざしてみる。精巧に偽造された透かしの福沢諭吉が、完成までの苦労をねぎらうように微笑んでいるような気がする。

ながめる純平も明治の思想家に笑い返した。

純平は子供の頃から模写が得意だった。最初は人気漫画を描き写して、友だちの喝采を浴びているだけだった。それが年齢を重ねるに連れ、技は研ぎ澄まされ、誰かの筆跡を真似て手紙を書いたり、絵のタッチを盗んで本物と見分けのつかない作品をつくるに及んで、周囲から気味悪がられるまでになってしまった。以降、贋作つくりは純平のひそやかな楽しみとなった。

いつごろだろう、偽札を作ろうなどと思い立ったのは。純平は大学を卒業してすぐに銀行に就職した。わずか三年間の勤めだったが、そこで彼はお金をめぐる人間たちの一喜一憂、喜怒哀楽をまざまざと見せつけられた。

誰もが喉から手が出るほど欲しい、お金、お金。

それなら俺が作ってやろう、単純にそう思い立った純平は、銀行を辞めると印刷会社に転職した。現在の印刷

技術の粋を身につけ、最高の偽札を作ってやろうと一念発起したのである。

彼の給料のすべては印刷機器の部品やインク、紙幣となる紙の原料などに消えた。彼は東西を問わずあらゆる文献を読み、実験を重ねた。新しい印刷機が開発されたと聞くと、その仕組みを徹底的に研究した。

そして苦節五年。純平は現代最高水準の印刷技術を会得した。

機は熟した。いよいよ最終段階。ゴールは目の前だ。

彼は偽札をつくるため、この春、会社を辞めた。彼の腕を認めていた社長は熱心にひきとめたが、偽札完成を目の前にした彼に、もはや収入源は必要なかった。

純平は、これまでにため込んだ貯金を全額投入して、必要な道具、薬品や原料などを揃えると、自宅に引きこもって最後の挑戦へと取りかかった。食料も大量に買い置きした。

こうして七ヶ月。さまざまな失敗と改良を重ね、ついに今日、最高傑作と胸を張れる偽札が完成した。見た目だけでなく、におい、指触りとも本物に瓜二つの一万円札。まだ最終チェックがいくつか残っているものの、彼には絶対の自信があった。

じつに長いトンネルだった。来る日も来る日もパソコ

ン画面とにらめっこする日々。特殊な磁気インクジェットプリンタの調整に余念のない毎日。いつか指はかさかさに乾き、身体じゅうにインクのにおいがしみついてしまった。

事が事だけに純平が一人で住む一軒家の窓はすべて雨戸が閉じられていた。誰とも話さず、ひたすら研究と実験の繰り返し。そうやって過ごした数ヶ月は、まだ二十代の若さとはいえ、さすがにこたえた。今朝ひさしぶりに玄関を出て、伸びをしたら、秋の日差しに目を射られて、のけぞるようにその場に倒れてしまった。

完成の翌日、サングラスをかけて街に出た。まだ足取りはおぼつかなかったが、この数ヶ月テレビや新聞を見ていなかったので、とりあえず世の中の出来事に目を通そうと、電車に乗って、二駅向こうの図書館に出かけた。

その図書館は、地方都市にしてはたいそう充実していた。純平は一通り新聞に目を通した。彼にとってめぼしいニュースは、来年の二〇〇四年、紙幣が一斉に切り替わるということぐらいだった。彼は動じなかった。刷った紙幣と交換すればいいだけのことだ。

気まぐれに一冊の薄いハードカバー本を借りて帰った。タイトルは『賢いお金の使い方』。

偽札づくりに青春を捧げた純平にとって、使い道など

考えている暇はなかった。完成したらとりあえず十億ぐらい刷り上げて、どこか離島でも買って余生を過ごそうぐらいしか頭になかった。彼にとっては偽札つくりの過程こそが最高の娯楽だったのだ。

また翌日。昨日の本を返却するために再び図書館を訪れた。借りた本は、とくに彼の欲求を満たす内容ではなかったので、さっき入った喫茶店で斜め読みしただけで返すことにした。

純平は図書の返却を済ませると表に出た。最寄りの駅は横断歩道を渡ってすぐのところだ。彼は切符を買うべく胸ポケットから財布を取り出し、中を開いた。

その瞬間、純平の顔から血の気がサーッと引いた。

……な、ない！

純平は何度も財布の中を確認した。しかし入っているのは本物の千円札が数枚だけである。

彼はよろよろと柱にもたれると、目を閉じた。

家を出るとき、彼は一枚だけ偽一万円札を財布に入れた。使ってみる気などさらさらなかった。彼お得意の気まぐれである。

それがいま、見あたらないのだ。

一応、入手できる限りの偽札識別機をすべてクリアした紙幣だ。大丈夫とは思うが、使い方だけは念には念を

入れて慎重に選ばなければならない。大っぴらに使うのはまだ先だ。なのに……彼は服のポケットをさぐってみた。しかしどこからも偽札は出てこなかった。

冷静になって思い出せ。どこかで使ったりしなかったか。たとえばさっき入った喫茶店。コーヒー一杯の支払いには千円札を出した。間違いない。それ以外で紙幣を出すようなことは……。

「あっ！」

純平は、弾かれたように図書館に向かって駆けだした。思い出したのだ。喫茶店で図書館の本を読んでいたとき、本にはしおりがなかったので、おもしろ半分に財布から一万円札を取り出し、しおりの代わりにはさんだことを。人の目に触れさせたいというやんちゃ心がなかったとはいわない。しかし、はさんだまま返却したなんてことは……ほかに考えつかない。

彼は赤信号を無視して横断歩道を渡ると、図書館の入口に通じる階段を駆け上がった。

キンコーン。閉館を告げる鐘の音が鳴った。かまわずロビーを駆け抜ける。開架室の入口をくぐり抜けたところで、前からきた中学生くらいの男の子と肩口がぶつかった。

「すまん！」

ロビーにへたり込んだ男の子を振り向きもせず、純平

は貸し出しカウンターへと一直線に駆け寄った。
カウンターにはまだ四五人の男女が、おのおの希望する図書をかかえたまま手続きを待っていた。純平は荒い息を整えながら、列の後部に並んだ。
一分が一時間にも感じられた。もしあの万札が誰かの目に触れたら。もし偽札だと見破られたら――。いやそんなことはありえない。
ようやく純平の順番になった。彼は眼鏡をかけた若い女性職員に、
「さっき返却した図書をもう一度貸してください」
と噛みつくように頼み込んだ。職員は驚いたように身を引いたが、すぐ事務的な態度を取り戻すと、
「お名前をお教えください」
「た、竹内純平です」
「竹内さん――」
女性職員は脇に置かれたパソコンをしばらく操作していたが、書名を確認したのだろう、今度は机の反対側に積まれた本に目をやった。
「借りられたのは『賢いお金の使い方』ですね」
「そうです」
職員はしばらく本の背中を目で追っていたが、
「すみません。係りの者がすでに書架の方へ戻すべく、持っていったようです」

「じゃあ、今すぐ取ってきます」
職員は何か声をかけたが、純平は後も見ずにカウンターを離れ、林立する書架の間に猛然とすべり込んだ。帰ろうとする人々が何ごとかという顔で純平を見やる。
「ここだ」
彼は該当する棚にたどりついた。しかしその本は影も形もなかった。
純平は再びカウンターにとって返した。
「おそらく戻す作業に手間取ってるものと思われます。お取り置きしておきますので、あさってにもう一度お越しください」
「あさって？　明日はダメなんですか」
「月曜日ですので休館になります」
純平は思わず目を閉じた。
彼はわかりましたと女性職員に告げると、がっくりと肩を落としてカウンターをあとにした。

深夜の図書館。
トイレのサッシ窓がカタッと揺れた。しばらくすると窓が静かに開いて黒い影がぬっと現れた。影は桟（さん）に両手をつくと、内側へと身体をすべり込ませた。
純平である。彼は床の上を音もなく進み、扉を少し開けて、館内の様子をうかがった。

開館中の偽札奪取が不可能だと知るや、純平はすぐさまトイレに入って窓の鍵を開けておいた。警備員がいるはずだが、どうやら怠慢だったらしい。おかげでやすやすと侵入することができた。

古い図書館だからセキュリティも設置されていない。純平は廊下に出た。カーペットが足音を吸収する。さいわい窓から差す街灯のおかげで中は明るかった。彼は迷うことなく貸し出しカウンターに近づくことができた。

「さて、どこから探せばいいのやら」

ひとまず、さっきも見た棚に行ってみたが、残念ながらまだ戻されてはいない。彼は舌打ちするとカウンターに帰ってきて、横の半扉を開けて中に入った。念のため、手には薄い白手袋をはめてある。

奥に簡易テーブルが並んでいて、その上にいろんな書物が一緒くたに置かれていた。この中にあるかもしれない。それにしてもかなりの量だ。純平はため息をついた。

やるしかないな。彼はポケットから小型懐中電灯を取り出して点灯した。そして手近なところから積み置かれた本の書名を一冊一冊確認していった。

一時間が経過した。まだ発見できない。純平はいささか疲れを感じた。無理もない。薄暗い中を懐中電灯の弱い光だけを頼りに背文字を追っているから目がしょぼつ

いてくる。本はどれも平積みだから自然と顔も横向きになり、首への負担も馬鹿にならない。ぶつくさ文句を言いながらも捜索作業を続行した。

途中で一度、警備員が巡回にやってきた。純平は本と本の間に身体を沈め、警備員をやり過ごした。ここで見つかってはたまらない。警察に通報され、やってきた警官になぜ侵入したかと問われ、本を探すためと白状しなければならなくなる。そして本にはさまった一万円札が注目を浴び、万が一偽物であると発覚したら――。

いかん。早く探して帰ろう。それが一番だ。

そう思って本の山から這い出そうとしたとき、奇妙な物音に気がついた。身体をひそめたまま様子をうかがっていると、廊下や天井を懐中電灯の丸い明かりがヒラヒラ動いている。警備員にしては不自然な動作だ。純平が固唾（かたず）を飲んで見ていると、懐中電灯の主はカウンターを乗り越え、純平のいる場所へと近づいてくるではないか。そして懐中電灯の光が純平に向けられた瞬間――彼は風にように動き、懐中電灯の主の口をふさいだまま、その頸（くび）に腕を巻き付けて捕まえた。

「子ども？」

純平は仰天した。声をたてるな、と言うと腕の中の少年はこくりとうなずいた。からめた腕をほどきながら、懐中電灯の光を相手にあてると少年の顔に見覚えがあっ

た。夕刻、ロビーでぶつかった子だ。
「こんなところで何してるんだ？」
「ぼ、ぼくは――おじさんこそ何してるの？」
「俺か、俺はアレだ、警備員だよ」
「ウソだ。さっき窓からこっそり入ったじゃない」
「……見てたのか」
少年はまたこくりとうなずく。
「しょうがないな――白状するよ。俺はある本を探してる。その本は他じゃ手に入らなくてね。しかも今夜じゅうに手に入れないと間に合わないんだ。もちろん、見たらちゃんと返すつもりだけど」
純平は適当にウソをまじえて話した。すると少年はしばらくうつむいていたが、やがて顔を上げると純平にこう言った。
「ぼくも同じなんです。どうしても今夜ある本が必要なんです。それで……入れないかなと思って外をウロウロしてたら、おじさんがやってきて」
「ふーん、俺と同じか……だけど」純平は腕時計を見た。
「もう午前二時だぞ。親御さんが心配するだろうに」
「だから父と母が眠ったのを見計らって来ました」
少年は悪びれたふうもなく答える。
「やれやれ、とんだ道連れができたもんだな……。
これも何かの縁か。それならいっそ、二人で二冊の本

を探そうじゃないか。その方が早く見つけられるしな」
「賛成です」
「君の探している本の名前は？」
「……『うつくしい日本語』です」
なぜか少年は、書名を口にするとき、はにかむようにうつむいた。そして脇の一冊の本を取り上げた。
「これくらいの大きさです」
「そうか。俺のは『賢いお金の使い方』だ。大きさは、君のと同じくらい」
「わかりました」
立ち上がろうとした少年に、純平は注意を呼びかけた。
「懐中電灯はあまり振り回すなよ。ときどき警備員の怖いおじさんが回ってくるんだ。発見されたら逮捕されて刑務所行きだぞ」
「は、はい」
少年は純平の脅しに素直に反応した。
「ところで君は名前は何という？　下だけでいいが」
「慎一です」
「慎一君か。俺は純平だ。よろしくな」
純平が手を出すと慎一もおずおずと手を差し出した。しっかりと握手を交わした二人はさっそく本探しを再開した。

慎一は純平と同じく、やはり閉館直前にその本を返却したのだという。あわてて戻ったがすでに門は閉じられていた。

懐中電灯で積まれた本の書名をのぞき込みながら、純平は慎一に話しかけた。

「それにしても、中学生が『うつくしい日本語』なんて本を読むんだね。まだまだ日本の若者は捨てたもんじゃないな。感想文でも書くのに使うのかい？」

「いいえ……」

返事の歯切れが悪い。思いつめた顔はこんな状況に飛び込んだからというのでもないらしい。

「慎一君、話してみないか。なぜ君はこんなにまでして、その本が必要なのかな」

慎一はしばらく無言で、動きの止まった懐中電灯の光を見つめていたが、やがて重い口を開いた。

「ぼく、好きな子がいるんです」

「え？」

「とっても素敵な子なんです。ぼくはその子に付き合ってほしいと告白しました。そしたらその子――佐田京子（さたきょうこ）さんにこう言われました。あなたのことは嫌いじゃないけど、この前の国語の授業で発表した作文、あれはいただけないわ、って」

慎一は、せき込むような早口で一気にしゃべってしま

うと、今度は一転、押し黙ってしまった。
純平はわざとらしいせき払いをひとつして間をとった。
「いただけないわ、だなんて、なかなかこましゃくれた女の子じゃないか」
「こましゃくれた――美人って意味ですか？」
「それは、こまたが切れ上がった、だ。……さて」
もう一度、小さな声でせき払いして、慎一のつむじに問いかけた。
「その京子ちゃんは君に、次の作文で汚名返上してみろと、こう言うのかい？」
すると慎一は弾かれたように顔を上げ、再び猛然と語り出した。
「そうなんです！　彼女をうっとりさせるような名文が書けたら付き合ってもいいって……。でも今のぼくなんかにそんな文章が書けるわけないし……。その日から勉強を始めました。彼女がうなるようなすてきな言葉を書いてやろうって」
しおれたと思ったら、突然血気盛んにまくしたてる。なんだか浮き沈みの激しい男の子だ。コンプレックスと初めて体験する恋心の間で揺れているわけか。まさに青春だ。純平は慎一に好感を持った。
「それで『うつくしい日本語』というわけか。京子ちゃんに胸を張って発表できるような作文を書こうと」

ところが慎一はまた、はにかむようにうつむいた。
「……いいえ、ぼく、考えてるうちにもっといいことを思いついたんです」
「というと？」
「作文なんかより、もっと直接、ラブレターを書こうかなって」
「……名文のラブレターをかい？」
「――はい」
純平は大きくうなずいた。懐中電灯の明かりも動作にあわせて上下する。
「そりゃいい。相手の意表をついてる。きっと京子ちゃん、びっくりして君に惚れ直すぞ」
「そううまくいけばいいんだけど」
「まさにキョンキョンだな。恋文（こいぶみ）京子――こいずみきょうこ、なんちて」
慎一がポカーンという顔をしている。
「古いギャグだ。忘れてくれ……。でも、どうしてまた『うつくしい日本語』なんだい？　ラブレターを書くなら直接見本になるようなハウツー本、世の中にたくさんあるんじゃないかい？　何も最初から最後まで美しい名文をつないで文章を作ろうなんて、むちゃな話に思えるけど。『彼女をその気にさせるひと言』だの『彼女のハートを射止める名ラブレター集』だのってタイトルの

本、ありそうじゃないか。そっちを参考にする方が早いし、君にとっても楽なんじゃないの？」
すると慎一はまたムキになった顔を純平に向けた。
「ダメなんです。そんなんじゃ！」
「どうして」
「彼女が言うんです。誰かの書いた文章のコピーなんか、お断りしますって。必ず、自分で考えた言葉で書いてほしいって」
「……なんとハイレベルな要求だな」
「ええ。それであの本はあくまで参考にするだけで、毎日文章を考え続けてたんです。それでちょっとぼくの頭は疲れてたんでしょう。今日が本の貸し出し最終日って気づいて、あわてて返しに来たんですけど――」
慎一が意味深な言葉の切り方をした。
「ん？」
純平が首を傾げると、慎一のモジモジ度が最高潮に達した。
「じつは、途中まで書いたラブレターを、本にはさんだまま返却しちゃったんです」
――なるほど。
純平は慎一の行動の理由がようやく理解できた。そりゃ、忍び込んでも取り返そうとするわな。
……でも待てよ。てことは我々の行動原理はまったく

同じというわけだ。純平は思わず苦笑した。
「じゃあ、絶対に見つけないといけないな。その本」
「はい」
「よし、気合い入れて探そうじゃないか」

さらに四十分が経過し、純平はついに発見の声をあげた。
「おい慎一君、これじゃないか、『うつくしい日本語』というのは」
すると慎一も同時に声を上げた。
「あっ――純平さんの本、『賢いお金の使い方』ってこれじゃありませんか」
互いに自分の見つけた本を相手にかざした。そして互いが間違いなく目的の本であることを認めた。
「やったな、慎一君」
「ありがとうございます、純平さん」
カッ。
突然、広い開架室がまばゆい光に満たされた。
「誰だ、そこにいるのは！」
警備員の声が高らかに響き渡った。
「しまった！　見つかった」
本を探すのに没頭するあまり、話し声が大きくなっていたのかもしれない。純平は悔やんだがもう遅い。

「ど、どうしましょう」
純平は、震える慎一の袖口をつかんで引っぱると、彼の耳に口を寄せて言った。
「警備員はおそらく一人っきりだ。俺が奴を引きつける。その間に君は、入ってきたトイレの窓から逃げるんだ」
「で、で、でも純平さんは？」
「俺か――」
純平は本をベルトと腹の間につっこんで立ち上がった。
「俺は大丈夫だ。だから君も捕まったりするな。無事に脱出して、いいラブレター書けよ」
それだけ言うと、カウンターの上をひらりと飛び越え、ロビーの方へと駆けだした。
「いたな、こら待て！」
警報が鳴り出した。そしてしばらくの間、図書館には二人のおとなの派手な足音がこだまし続けた。

一番電車が走り始めたころ、純平はようやく自宅へと帰り着いた。
図書館では慎一が逃げる時間をかせぐため、最初のうち、警備員相手に、わざと書架の間を鬼ごっこして逃げ回ったが、遠くにパトカーのサイレンが聞こえると、あわてて近くの窓を開けて庭に飛び出した。庭は夜の冷気に充ち満ちていた。

こんなこともあろうかと、侵入する前に建物の周囲を下見しておいたのが役に立った。純平は警備員の怒号を置き去りにしたまま、塀のもっとも低い場所を乗り越えると、駆けつけた警官が非常線を張る前に、余裕を持って現場を離れることができた――。

「ああ、もう起きてられない」

目的の本を手に入れられた安堵感も手伝い、純平は布団の上に倒れると、すぐに寝息をたて始めた。

慎一も無事に帰宅していた。まったく純平のおかげであり、慎一は冷や汗以外の汗をかくこともなく、自宅まで歩いてたどりつくことができた。サイレンの音がしたので純平の身が心配ではあったが。

両親はまだ眠っている。慎一は二階の自分の部屋に入ると、持ってきた本を服の下から取りだした。そのときになって慎一は気づいた。なにも本ごと持ってくる必要はなかったんだと。中にはさんだ書きかけのラブレターだけで良かったのに。

取り出した本を机の上に置いた慎一は、さらに驚きの声を上げそうになって、あわてて口に手を当てた。

『賢いお金の使い方』。

なんてこった！　間違えて純平さんの本を持ってきたんだ。大きさといい厚みといい、同じくらいだったので、

これだと思いこんでいたのだ。すると純平さんは自分の本――ラブレターの入った本を持っていってしまった。あああ……。

頭を抱えた慎一は、本の間からはみ出ている紙に気がついた。ページを開いてみると、そこには折り目のない一万円の新札が、まるでしおりのようにはさまれていた。もしかして純平さんのお金？　ひょっとして純平さんはこれを取り戻したくて忍び込んだのだろうか。きっとそうだ。大金だもの。返してあげなくちゃ。そしてぼくも純平さんからラブレターを――。

慎一はそこまで考えるのが精一杯だった。無事脱出の安堵感と、取り違えたことの落胆がごちゃ混ぜになった気持ちのまま、猛烈な睡魔に襲われ、布団の上に倒れた。

やがて机の向こうの窓辺に朝陽が差し、カーテンの隙間からもれた陽光が、本と一万円札を照らした。

「あなた、ちょっとこれ見て」

「どうした、ただの一万円札じゃないか」

「慎一を起こしに行ったら、机の上に」

「なんだって？」

慎一の家は、お金の管理に厳しかった。親戚からもらうお年玉なども、両親に全部渡して、慎一名義の銀行口座に振り込まれていた。若いうちに大金を持つのはよろ

しくないというのがこの家の流儀で、アルバイトも大学に入るまで許さない、貯金を自由に使うのもそれまでのお預けということになっていた。その代わり、こづかいとして月々決まった額だけ千円札で渡している。それもこれも銀行に勤める厳格な父親の決めたことだ。

なのにどうしてこんな新品の一万円札をあの子が。

父親は手に持ったお札をまじまじと見つめた。ふと彼の眉がくもった。

「あなた、どうかされました？」

「うん……慎一はまだ起きてこないか？」

「あ、階段を下りてきましたわ」

一万円札の出どころを訊ねられて、慎一は純平の名前を出さざるを得なかった。それでも深夜に図書館へもぐり込んだことは話さなかった。

「それじゃこのお札は慎一のものじゃなく、図書館でたまたま話をした純平って人のものなんだな？」

「はい」

父親はじーっと慎一の目をのぞきこんだ。慎一は視線をそらさないよう、精一杯肩肘を張って対抗した。

父親は重ねて質問した。

「おまえの考えでは、本を取り違えた相手は困っている、相手もおまえが困っていることを知ってるから、今日に

でも図書館でおまえの来るのを待っているはずだと？」
「そう思います。……いい人だから」
「向こうはおまえの本を持って、かい？」
「はい」
父親は立ち上がると、電話をかけに行った。入れ替わりに母親が朝ご飯の用意を整えながら話しかけてくる。
「さあ、おあがりなさい。このところ本に夢中で夜ふかししてるでしょ？　たんと食べておかないと学校で倒れるわよ」
なぜかいつも以上に冗舌だ。明らかに父親の電話の声が聞こえないようにしている。それでも耳を澄ましていると、かろうじて言葉の断片が聞こえた。
「ええ――遅れますがお許しください――これから警察の方に」
警察？　どうして？
父親は一度受話器を置くと、またすぐに持ち上げて、どこかにかけた。
「――銀行のものです。じつは――一万円札が――」
慎一は、食卓のはしっこにさりげなく乗っているお札に目がいった。折り目のない新札。純平さんのだ。でもどことなくおかしい。何かが違う。
「――偽札が――」
父親の声に、慎一はアッと心の中で叫んだ。

ニ・セ・サ・ツ。にせもの？
そして慎一はようやく自分の感じた違和感に気づいた。お札の色がふつうと違うことに。
受話器を戻した父親が、慎一のそばにやってきた。

純平が目を覚ましたのは、午前十時を大きく回ったころだった。あくびを一つして、布団の上に起きあがると、取り戻した本が目に入った。
「あれ？」
素っ頓狂な声をあげて、彼は本を取り上げた。
「どうしてここに『うつくしい日本語』があるんだ？」
純平は動揺しながらも、ページをぱらぱらとめくった。するとひらひらと一枚の紙が畳の上に落ちた。レポート用紙を折り畳んだもので、広げるとそこには、びっしりと鉛筆で書かれた文字が並んでいた。
ラブレターの下書きか。
純平は、紙の上に目を走らせた。書かれた文章を読み進むうち、頬がゆるんでくるのをどうしようもなかった。
つたない文章だとは思う。それでも純平には、一生懸命考えながら文章をひねり出そうとしている慎一の姿が目に浮かんだ。
まったく罪な女だよキョンキョンは。
〝誰かの書いた文章のコピーなんか、お断りします〟。

コピーか――。
それならどうだい、俺のやっていることは。
純平は部屋を見回した。パソコンや高性能の印刷機に薬品、インク、果ては紙を作る機械まで。
これはすべて〝コピー〟を作るための設備だ。キョンキョンのお気には召さないかな？
その時、紙の隅っこに走り書きされた四文字熟語が目に入った。『温故知新』。
懐かしい言葉じゃないか。小学校で習ったっけ。古いものを研究し、そこから新たなものを生み出す。
……俺のやったことは、温故どまりだった？

純平は、ふうと息を吐いた。そしてやおら万年床の上に立ち上がると、ジャケットに袖を通し、慎一の本を小脇に抱えて――もちろんレポート用紙を中にはさんで、家の外に出た。

「お父さん、あそこに止まってる車、私服警官なんでしょ？」
「……よくわかったな」
慎一と父親はもう二時間ほど、図書館の前に立っていた。入口の自動ドアには『本日は休館日です』の立て札がつり下げられている。

「あの一万円札、そんなによくできてたの？」
「うん。ふつうなら父さんにも見分けられなかったろうな」
「作ったのは、純平さん？」
「たぶん……いや、それをたずねるために、一度警察に来て、話してもらう必要があるんだよ」
「……」
何本目かの電車が、図書館前の駅にすべり込んだ。改札から乗客が出てくる。
慎一の目が、その中に純平の姿を認めた。右手にはあの本を持っている。そして自分の右手にも――。
純平は手のひらを目の上にかざすと、道路の向こう側からこちらを見上げた。そして信号の変わった横断歩道を、手を振りながら駆け寄ってくる。
隣の父親が何か合図したらしい。覆面パトカーから二人の刑事が降りてきた。
慎一は緊張した。そして思わず叫んでいだ。
「純平さん、逃げてーーーっ！」
歩道を通行していた人々、横断歩道を渡っていた人々、駅の券売機の前にいた人々、みんながこちらを振り向いた。純平の足も横断歩道の途中で止まった。そして慎一

の肩を押さえている年輩の男性の姿が目に入った。同時に自分に駆け寄ってくる、いかめしい顔の二人にも気がついた。

信号が点滅を始めた。まもなく車が走り出す。

今ならまだ逃げられる。今なら――。

純平はおおげさに深呼吸すると、軽快な足取りで横断歩道を渡り終えた。そして図書館の階段をトントンと昇ると、両足をそろえて、慎一の前に立った。

「こんにちは、慎一君」

「……こんにちは、純平さん」

背後に迫った刑事たちも、純平の様子に顔を見合わせた。

「お父さんでいらっしゃいますか？」

「あ、ああそうだが」

「どうして気づかれたんですか？」

父親はどうしたものかと面を伏せたが、すぐに決心がついたように顔を上げた。

「君は作った紙幣を日光に当てたかね？」

「いいえ。ずっと閉めきった家にこもっていたもので」

「少しでも当てたらすぐわかったろうにな」

「――そうか。変色したんですね。やはり検証不足だったか」

「……」

純平は慎一の方に向くと、持ってきた本を差し出した。
「うっかり間違えてしまった。ごめん」
「あの……あの」
目を泳がせる慎一に、純平は優しく話しかけた。
「安心して。レポート用紙はこの中にちゃんとはさまってるよ。――それから済まないけど、君の持ってる本は、ぼくの代わりに図書館へ返しておいてほしい」
「……はい」
「ありがとう――これですべて終了だ」
純平はその場で身体の向きを変えると、立ちつくしている刑事の前に降りていった。
「あ、そうそう」
純平は階段の途中で立ち止まると、振り返って慎一に笑いかけた。
「いつかぼくも、キョンキョンにラブレターを書いてみようと思ってるんだ。いいかな？」

〈了〉